

36. また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。

この人は非常に年をとっていた。

処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、

37. その後やもめになり、八十四歳になっていた。

そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。

38. ちょうどこのとき、彼女もそこにおいて、神に感謝をささげ、

そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。

39. さて、彼らは主の律法による定めをすべて果たしたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰った。

40. 幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちて行った。神の恵みがある上にあつた。

説教

イエスさまが生まれて八日目に、割礼という神さまへの聖別の儀式を終えたマリヤは、さらに33日間、合計40日間にも及ぶ「きよめの期間」を、ひたすら引きこもって過ごします。「汚れ」た、いわば神さまに見捨てられた状態に置かれ、神さまと「差し」で向き合いながら、人はどこから来てどこへ行くのか、何のために生きるのか、自分と子どもの人生を神さまの前によくよく考えさせられます。そうした「きよめの期間」を終えた後に、神殿にきよめのいけにえを献げに行つたところ、老シメオンから、幼子が「万民」の前に救いを備え、ローマ帝国も含めた全世界の「異邦人を照らす啓示の光」であり、「御民イスラエル」にとっては、彼らとその光を受けて、全世界に神の栄光をあらわすところの光源なる「神の栄光」そのものであるというお告げを聞きます。それでシメオンは、「あなたの救いを見た」と喜びを爆発させて叫び、「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。」と、御国の平安にすっかり満ち足りながら、今や天に召されんとしていることを告白するのです。そして同時に、神の救いの光そのものであらわれるキリストの生涯が、悪魔の陣営から総攻撃を受けて殺される波乱の生涯であることも予告し、それを見守り続けるマリヤもまた、「剣によって心さえも刺し貫かれる」生涯となることを覚悟するよう教えられます。「剣によって心さえも刺し貫かれ」ながら、死ぬほどの苦難を耐え忍んで御心を全うしなければならないマリヤの宿命は、同時に、真にキリストと共に生きる者たちの宿命でもありました。以上が先週までの話でありました。

実は、この話はここで終わりません。老シメオンに続いて、もうひとり、お年寄りが登場します。それが女預言者アンナです。この人は、失われたアセル族パヌエルの娘で、「非常に年をとって(直訳は『多くの日々の中を歩んで』)」いました(2:36)。「処女の後七年間夫と共に暮らし、84歳(年)までやもめであり」ました(37直訳)。当時の結婚適齢期を考慮すると、およそ14歳前後で結婚して夫と共に暮らしたものの、20歳前後で夫と死別してやもめとなります。それから84歳になるまでおよそ64年間、やもめとして暮らしてきたというのです。「歳」を「年」と訳すならば、夫と死別後84年間、やもめとして生きてきたことになり、実に100歳を超える計算となります。いずれにせよ、アンナは夫を失うというこの上ない深い悲しみを経験した後、長い長い年月をやもめとして生きてきたのでした。

しかし聖書は、アンナが単に不幸で苦勞の多い生涯を生きてきたと解説するにとどまりません。聖書はまず、アンナが「女預言者」であったと記します。つまり、この人は神のことばを預言する「預言者」であったというのです。夫と共に夫婦生活を営んでいた時には、夫のパートナー、夫の助け手として夫に仕えておりました。しかし、夫が召されてからは、神と共に歩む神の良きパートナーとして神に仕えて生きてきたのです。37節にはアンナの生活ぶりが紹介されていますが、それに

よると「宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた」とあります。アンナは人々に神のことばを語ることによって奉仕するだけではありません。本当によく祈る人であったということがわかります。その祈りの生活ぶりは、「夜も昼も」神さまに祈る生活でありました。日が昇って明るい昼に神さまに祈り、のみならず、それだけでは足りないばかりに、「夜も」神さまに祈りました。

使徒パウロは後に、テモテへの手紙の中で、「ほんとうのやもめ」は「**望みを神に置いて、昼も夜も、絶えず神に願いと祈りをささげている**」(Iテモ 5:5)と言いました。その意味では、アンナは、パウロの言う、教会が敬意を表すべき、模範的で理想的な「ほんとうのやもめ」(5:3,5:5)でありました。

「断食」も「祈り」も原文では複数形で表現されており、一度のみならず、何度も何度もなされたことが読み取れます。「断食」というのは、それ自体全く何の功績にも修練にもならないものです。むしろ場合によっては害悪にもなります。あくまで「祈り」の補助手段としてのみ有効なものです。つまり、よりよく、より切実に祈るための補助手段として、「断食」は初めて意味を持ちます。それで旧約の聖徒たちは、神さまに罪を示され悔い改める時や切実な嘆願を神さまにする場合には、断食して神さまに祈りました。預言者アンナは、そのようにして、すなわち断食をもって神さまに切に祈っていた(原意は「嘆願していた」)のでした。

それでは、アンナが宮を離れることなく、夜も昼も断食しながら神さまに切実に嘆願していた内容はどのようなことでしょうか。それは「エルサレムの贖い」です(38)。「贖い」とは、元来、身代金を支払って奴隷が解放されて自由になるということの意味します。それが他の用例では、「私たちをすべての不法から贖い出す」とか、「あなたがたが先祖から伝わったむなし生き方から贖い出される」と言われます。これに「～から」という接頭語がくっつくと、「罪の責任から逃れる」の意味で「罪の赦し」と同じ意味に使われます。

「この御子のうちにあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」(コロサイ 1:14)

「牢獄からの釈放」という意味でも使われます(ヘブル 11:35)。

「そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。」(ローマ 8:23)

つまり、罪の束縛から解放されて、魂とからだ神の栄光の自由へと入れられることです。より大胆に表現すれば、この地上に神の国が到来することです。神さまがこの世界を創造されて、それが悪魔によってダメにされている現実を一掃して、再び創造する、再創造するのです。この世界を新しく造りかえます。罪を贖って、罪を赦されて、罪の呪いを解かれて、神さまの祝福に満ちた新しい世界へと再創造されます。キリストという代価を払って、もともと神さまのものであったこの世界を、神さまは悪魔の手から奪い返して、栄光に満ちた御国へと回復なさるのです。「ヤコブの分け前はそんなものではない」との預言のみことばの通り、世界を神の国へと新しく回復してくださるのです。

それをアンナは待ち望んでおりました。アンナは宮を離れることなく、夜も昼も、断食しながら、御国の到来を神さまに嘆願し続けてきました。

そして、「エルサレムの贖い」を成し遂げるそのお方こそ、実に、ご自身の血をもって罪を贖われるイエス・キリストまでありました。アンナは、幼子のイエスさまを見た時、「神に感謝を捧げ」、アンナの他にいた「エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語り」ます。シメオンの預言通り、この幼子こそユダヤ人・異邦人・万民を照らす神の救いの光であると語ったことでしょう。

私たちもそのように生きたいと願います。シメオンの言う通り、キリストは万民を照らす啓示の光でありました。そして、アンナの待望していた通り、私たちを贖ってくださるお方です。私たちの「罪」を贖い、私たちの「罪のからだ」を贖ってくださるのです。ご自身の十字架で流された血をもって私たちの罪を贖い、やがて再び世に来られて、私たちの罪のからだを贖って、キリストと同じ栄光のからだに新しく造りかえてくださるのです。シメオンやアンナのように、キリストの御再臨を切に待ち望み、救いを待ち望むすべての者に福音を宣べ伝えたいと祈ります。